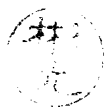


POPULAR BOOKS





昭和41年8月1日 発行

浮気な死神

著者 高木 彬 光

発行者 矢 貴 東 司

印刷者 北 山 茂

¥270.

発行所 株式会社 桃 源 社

東京都中央区日本橋蛸屋町1-12

電話(666) 4001~2 番

振替東京64351 番

落丁・乱丁の節はお取替え致します

1966 ©

浮気な死神

高木彬光

<大前田英策推理ノート>



<桃源社 ポピュラー・ブックス>

目次

第一話	浮気な死神……………	七
第二話	お前の番だ……………	二六
第三話	掌は語る……………	六九
第四話	二十三歳の赤ん坊……………	一三
第五話	魔の首飾……………	一六
第六話	死恋……………	一九

装幀 三井 永一
挿絵 司 修

浮
気
な
死
神

第一話 浮氣な死神

一

「ここだろうな。木村実という表札が出ているからまず間違いはあるまいて」とつぶやきながら、大前田英策は、玄關のベルをおした。

中からは三十四、五の眼鏡をかけた品のいい女が出て来た。ちょっと正体がかめないで、
「奥様はおいでになりますか？」

とたずねると、

「わたくしが木村の家内でございますが、どちらさまでございましょう？」

と反問されて、英策もちょっとどきまぎしながら、

「いや、洋裁のデザイナーをしていらっしゃる木村先生はこちらではないのでしょうか？」

女の顔には、ちらりと奇妙な影がかすめた。人の表情を読みとることにはなれている英策でも、ちよつとその意味が判断出来かねた複雑きわまる表情だった。

「ああ、むこうの木村さんですか？ 何しろ町内に同姓同名のお方が越しておいになったので、しょっちゅうお間違になるお方があって困ってしまいますのよ。そちらでしたら、この道を二丁ほどおいでになって、右へ曲ったところでございます」

「いや、どうも失礼いたしました」

とあやまって、英策は教えられた通りの道をたどった。

なるほど、木の香もまだ新しい二階家に、ここにも『木村実』という陶器の表札がかかっている。今度は無事に応接室へ通されて、女中の運んで来た紅茶をすすっているうちに、やっと見おぼえのある木村あや子があらわれた。

時間は日曜日の二時だったが、あや子の年齢もまずそうだったところだった。

職業がこういう職業だし、パリーへも二、三度行ったことがあるというだけに、あや子の服装には一分一厘の隙もなかった。外国製の珍しい香水の香りがむっと英策の鼻粘膜を襲って来た。

「ちようどよろしゅうございましたわ。わたくし出かけておりまして、いま帰って来たところですのよ。お約束の時間に遅れてはまずいと思ひまして」

という声も深みがあってさわやかだった。

「いや、こちらも時間は正確な方ですが、実は家を間違いましたので……」

「まあ、先生のようなお方でも？ それでも同じ町内でございますから御無理はございません

浮気な死



わ。お客様ならよろしゅうございますけれど、郵便屋さんのこぼすことったらありません。こちらもこの家を建てましたときには、まさか同じ町内に、同姓同名のお方がいらっしゃるとは知らなかったものですから」

「法律的には、どちらかが名前を変えられますけれど——これは大いに困った事態が発生することもあるでしょうな。そうそう、元首相の吉田茂氏がどこかの大使をしていたころ、大臣か官房長官に、やっぱり吉田茂氏がいて、お互いに困ったといえますよ。最後にどっちも協定を結んで、食料品のお使い物は、たとえ贈り主におぼえがなくても、自由に処分していいということにしたそうです」

「あら、わたくしどももそうしておりますのよ。主人同志の話しあい——その故智こちに習ったのかも知れませんかね」

あや子は笑って、それからすぐに事務的な話にうつった。

用件というのは大したことはなかった。あや子の弟の則夫という青年に、縁談が持ち上ったので、その相手の身元調査を依頼して来たのである。その報告書が出来たので、あや子の都合を電話で問いあわせると、今日の二時に自宅へ来てほしいということだったので、こうしてやって来たのだった。

「まあ、私の方の調査の結果はこの通りです。最後の決定は、もちろんおたくにお任せいたしますが、これで私の責任は一応果たしたことになります……」

話の途中にも、玄関で二、三度ベルが鳴り、女中がその度に來客を知らせて來た。近くの部屋で花やかな話声が聞こえて來るところを見ると、みんな若い女性のようだったが、英策が話を手短かに切りあげて腰を浮かしかけると、あや子はそれを手でおさえ、

「先生、どうもありがとうございます。でも、最後に一つお願いがございますのよ。相手のお嬢さんはいまここにいらっしやっていますの。一人じゃ何だからと思って、ほかに二、三人お呼びしましたが、おついでにお手のものの人相学で本人を見てやって下さいません」と声を低めていい出した。

それほど手間もかかるまいと思つて、英策はふたたび椅子に腰をおろした。この偶然ともいえるような選択が、彼にまた一つの殺人事件に直面する機会を与えるようになるうとは、さすがに神ならぬ身の知る山とでもなかったが……

二

いくらか美人不美人の差はあつても、やはり五人も妙齡の女性が集れば、その場の空気も浮き立つし、話も賑やかにはずんで來る。

最初は、ちよつと英策に遠慮していた娘たちも、次第次第にその存在を意識しなくなつて、ふだんの生地を出しはじめた。

それはもちろん、野武士が背広を着たような英策の男性的な風貌と、その巧妙な話術とが、み

んなの心をひきつけたために違いがないが、それにしても、こういう席で話題が『死神』といういわれ多い言葉にふれたのは、偶然といいながら、何ともふしぎな事だった。

話の起りは『死の寓話』という題の現代音楽のことからだったが、その話の途中で、身元調査の対象だった永野敏江が、突然口をはさんで来たのだ。

「みなさん、死神の寓話を知っていらっしゃる？」

敏江がいくらか出しゃばりで、負けずらいだということは、英策も調査の結果、よく知っていた。恐らく、音楽の方は苦手なので、話題をよそへ転じようとしているのだろうと彼は心の中でした。

「どんなの、話して！」

「むかしテヘランの町に一人のお金持があつたと思し召せ。その男が多勢の召使をつれて、テヘランから二日ぐらいかかる別の町に滞在していたのね。ところがその召使の一人が、血相かえたとんで来て、

——旦那さま、私は今朝死神に出あいました。やつは私の顔を見て、ぎょろりと恐い眼でにらみつけましたから、もうこうしてはおられません。どうかお暇を下さいまし。

というなり馬に鞭打って、テヘランさしてかけもどったのよ。ところが、その日の午後になって、今度は御主人の方が市場で死神に出あったのね。こっちは気丈な男だから、

——お前さんは今朝、おれの召使を大変びっくりさせたそうじゃあないか？ おかげでやつは

真青になって、テヘランへかけもどったよ。

と物言いをつけたの。ところが今度は死神の方が大きく溜息をついて、

——そういうけれど、びっくりしたのはこっちの方さ。実はあの男とは、今日の夕方、テヘランの城門であうはずだったのに、こんな所にいるはずはない。おれはよくよく物おぼえが悪くなったのかなと思っていたよ。

というお話——死神というやつは、どんな所へ逃げ出しても、一旦これと目星をつけたら、必ず先廻りして待っているという教訓ね」

「やめて！」

突然、英策の隣に座っていたファッションモデルの泉麗子が、ヒステリックな叫びをあげた。

「まあ、麗子ちゃん、どうしたの？」

「よしてよ。よして、そんな恐い話は……」

白けた空気がその場を包んだ。英策もちらりと横へ視線を投げたが、たしかに麗子の興奮は芝居や冗談とは思えなかった。

客は彼女のほかはデザインの弟子ばかりだから、麗子の美貌は一きわ群を抜いていたが、そのすらりとした長身はかすかにふるえ、情熱的な大きな眼には、ただならぬ恐怖の色があふれていた。何が麗子をそのように驚かせたのか、英策がその理由をたずねようと思っっているうちに、女

中が部屋へ入って来て、

「奥様、いまこれがとどきました」

と菓子箱のような包みをさし出した。

「まあ、チョコレートね？ 友田さんって聞いたことのないお方だけれど、むこうかしら？ でも食物だから、こちらで処分しましょうよ」

あや子は笑って、化粧箱を英策の前にさし出した。

「先生、おひとつ、いかが？」

「僕はいにく甘いものには……」

「そうそう、先生は左ききの方でいらっしゃるでしたね」

さすがに悪くはすすめなかった。それから、麗子はチョコレート・クリームを一つつまみ、後は順ぐりに箱が送られた。

「先生、先生はこのお仕事をお始めになって何が一番おいやでした？」

あや子の間に英策は笑って、

「先生と呼ばれることでしたね」

「まあ、どうして？」

「私立探偵という商売は社会と人生の溝さらいみたいなもので——もっとも、祖先の英五郎も自分ではそういっていましたが、職業を卑下するつもりはありませんけれど、何だかくすぐった

くなりましてね」

「あら、そんなことありませんわ。このごろじゃあ、美容師の方だって、パーマネントは芸術だから、先生と呼ばれるのはあたりまえだといばっていますわ。むかしでいえば、髪ゆいさんがそんなことをいう時代ですもの。先生のような犯罪捜査のお仕事は、科学と芸術を綜合した御りっぱなものじゃございませんか？」

「ところが、犯罪捜査というやつはこちらが脇役なものですから、犯人の方に芸術的な意慾があれば話は別ですけれど……」

といいかけて、英策はとび上った。

「死神！」

この狂わしい叫びをもらして、隣の席の泉麗子が、ばたりと床に崩れたのだ。

「麗子ちゃん！」

「いったい、どうなすったの！」

英策はぐつと麗子の体をだきあげ、脈をとり、その口に指をつっこんで、吐かせようとしながら、

「医者を！ お医者を！」

「先生、どうしたんですの？」

「毒です……恐らく青酸中毒……」